春 岡 村 の 伝 説

真言宗智山派多聞院の六地蔵石仏

今回は丸ヶ崎村の菩提寺、多聞院にある六地蔵石仏を紹介します。
お寺にはたいがい六地蔵が安置されていますが、多聞院のものはたいへんめずらしいものだそうです。というのも、さいたま市内で遺されている唯一の中世石仏で、県内でも中世石仏は、他に二体ほどが遺されているにすぎません。

六体のうち、向かって右側の五体は、亥首で簡素なつくりから室町時代中期から（１６世紀）のものと推定されています。左側の一体は寛永十九年（1642）と刻まれていて、おそらく、あとから補ったものです。

この六地蔵石仏は、昭和５０年頃、大宮市教育委員会が、丸ヶ崎観音堂の馬頭観音を調査したとき、境内と隣家との境で三分の二くらいが土に埋もれた状態のものを偶然発見しました。調査の結果、貴重な文化財ということで、多聞院の境内に祠を建て安置しました。

六地蔵信仰は平安時代末期から始まりました。地蔵が六道を輪廻転生する衆人を救済する、ということから、六つの分身を生み出し、六界・六道に配しました。地獄まで現れて衆人を救うのは、地蔵菩薩だけなので、墓地の入口に六地蔵を安置することが多いのだそうです。

多聞院の六地蔵の持ち物は、向かって右側から「合掌、経箱、（不明）、衣内印、（不明）」そして、寛永時代のものは、左手に錫杖、右手に宝珠を持っています。

お＊ま＊け

「ついたちまんじゅう」

かつて埼玉県内には「ついたちまんじゅう」といって、旧暦６月１日(７月１日)に、収穫したばかりの新小麦でまんじゅうを作り、神棚や仏壇に供える風習がありました。

深作の農家でも、朝からまんじゅうを作り、神棚や仏壇にお供えし、親戚や手伝ってくれた近所の人に配りました。また、深作では旧暦８月１日は八朔の節句で「朝まんじゅうに昼うどん　夜ははだかで渋うちわ」といって、農休みの日でした。
朝は小麦粉で作った自家製の田舎まんじゅうを食べ、昼は手打ちうどんを作り、お腹いっぱい食べて一日中寝そべって体を休めました。

さいたま市内の和菓子屋さん９店が「ついたちまんじゅうの会」を結成し、各店オリジナルのついたちまんじゅうを開発し、毎月１日にそれぞれのお店やデパートなどで販売していますよ。　（平山由喜）